

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00569

研究課題名(和文) フランス語の名詞句表現の意味論的研究とその対照研究への応用

研究課題名(英文) Semantic Studies of French Noun Phrase Expressions and Their Application to Contrastive Studies

研究代表者

奥田 智樹 (Okuda, Tomoki)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：20293722

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：フランス語の「N a V型名詞句」について用法を「義務および可能」「結果」「方向性」の3つに大きく分類した上で、詳細な意味分析を行った。「義務および可能」については、義務と可能の意味の結びつきを明確にした上で、それぞれの意味が現れるメカニズムについて論じた。またa Vの部分否定形ne pas Vとなる場合の性質を明らかにした。「結果」については、こういったa Vの用法が名詞句以外にも見られることに注目し、当該の名詞句の成立過程について仮説を提示しその検証を行った。「方向性」については、a Vの部分否定をNの分類の指標とする見解を示しつつ、「義務および可能」との意味上の隣接性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語学において、モダリティ(発話において話し手の主観を述べる部分)に関する研究は、これまで動詞を中心とする文のレベルで行われることが多かったが、本研究はこれを名詞句のレベルで行うという点で、新たな学術的価値を有する。また、これまでのフランス語の名詞句表現研究の多くは、類型論的記述を目指すものや限定辞と名詞との意味的関連に注目したものであり、名詞句自体の意味内容に積極的に踏み込んだものは少なかった。本研究は、そうした方向性のある研究の一つのモデルケースともなり得るものである。さらに、本研究で得られたフランス語に関する成果は、他言語の名詞句表現研究や対照言語学的研究にも貢献し得るものである。

研究成果の概要(英文)：A detailed semantic analysis of French "N a V-type noun phrases" was conducted after classifying their usage into three major categories: "obligation and possibility," "result," and "direction." For "obligatory and possible," we clarified the connection between the meanings of "obligatory" and "possible," and discussed the mechanism by which each of these meanings appears. The nature of the case in which "a V" becomes "a ne pas V" was also clarified. As for "result," we noted that this kind of usage of "a V" can be found in cases other than noun phrases, and proposed a hypothesis about the formation process of the noun phrase in question, which we verified. As for "direction," we pointed out its semantic adjacency with "obligatory and possible," while presenting the view that the "a V" part is an indicator of the classification of N.

研究分野：フランス語学

キーワード：意味論 名詞句表現 「義務および可能」 「結果」 「方向性」

## 1. 研究開始当初の背景

言語学には伝統的に、文の構造は「命題」(客観的事実を述べる部分)と「モダリティ」(話し手の主観を述べる部分)からなるという考え方が存在する。このモダリティに関する研究は、これまで動詞を中心とする文のレベルで論じられることが多かった。しかし近年、例えば日本語や中国語などにおいて、モダリティは名詞句のレベルでも観察されることが様々な例で確認されている。本研究は、こうした学術的背景を踏まえて、名詞句レベルでのモダリティ研究をフランス語において実践しようとするものである。

フランス語の名詞句表現を取り扱った研究自体はこれまでも行われてきたが、その多くは類型論的記述を目指すものや限定辞と名詞との意味的関連に注目したものであり、名詞句自体の意味内容に積極的に踏み込んだものは少なかった。

研究代表者は2016年頃からフランス語の名詞句表現に関する研究を手掛け始め、奥田(2017)においてその第一段階の成果としてフランス語の「NV-able型形容詞」型名詞句と「NàV」型名詞句および日本語の「動詞+『べき』名詞」型名詞句の意味的な関連について分析した。

本研究は、この論文の主にフランス語に関する部分の拡充と発展を目指すものであり、その第一段階として「NàV」型名詞句を中心に検討する。この名詞句は、フランス語で非常に多用されるものの、Sandfeld(1965)やHuot(1981)が不定詞の一用法として論じている以外には、ほとんど先行研究がない。Sandfeld(1965)は「àV」の表す意味を方向性、結果、義務および可能、制限的意味、場所的意味、原因的および道具的意味の6つに分類しており、「NàV」型名詞句についてもこのそれぞれの意味に対応する例を提示しているため、本研究における分類の指標としても援用する。本研究では、特に注目すべきと思われる「義務および可能」: *travail à refaire* 型、「結果」: *soleil à faire fondre le chocolat* 型、「方向性」: *machine à laver* 型の3つのグループを取り上げた。

## 2. 研究の目的

本研究はフランス語の名詞句表現である「NàV」型名詞句について、意味論的な観点からその特質を明らかにすることを目的としている。また類義表現として、「NV-able型形容詞」型名詞句および「N受動的用法の代名動詞を含む関係詞節」型名詞句も研究の射程に入れている。これらの表現はいずれも義務や可能の意味を表す場合があり、話し手の主観に深く関わる意味内容を持つ。本研究ではこれらの意味的差異や互換性の検討、および関連構文との比較対照などを通じて、「NàV」型名詞句の多義性について詳細な分析を行う。実際には、その意味的内実は、判断の主体の主観性が強く反映したものからそうでないものまで様々であるため、そのうちのどの部分をもってモダリティ表現と呼べるのかという弁別について、本研究によって明確な解答が与えられることになる。

## 3. 研究の方法

本研究の基本となる作業は、用例の収集と分析、文献の講読に基づく基礎資料の作成と論文の執筆であり、これらはいずれも基本的に名古屋大学における研究代表者の研究室および自宅で行った。文献は今回の科研費で購入したほか、名古屋大学図書館にて他の図書館に文献複写申込や現物貸借申込を行うことによって入手した。様々な用例は主にインターネット上のデータベースから収集し、必要に応じて関連文献に掲載されている例文を利用した。フランス語の作例の容認度判断については、名古屋大学に勤務する研究代表者の同僚のフランス人インフォーマント4名の協力を得た。

## 4. 研究成果

本研究では「NàV」型名詞句について、統語的、意味的性質の異なる次の3つのグループを主に取り上げて分析を行った。

### 「義務および可能」: *travail à refaire* 型

「NàV」型名詞句には、(1)(2)のように「義務」を表すと見なせるものや、(3)(4)のように「可能」を表すと見なせるものが多数存在する。

- (1) Il y a beaucoup de *monuments à visiter* dans cette ville.
- (2) Une fois le code entré et les conditions acceptées, vous accédez au *document à signer*.
- (3) Je suis magicien illusionniste. [...] Pour ceux qui sont intéressés je peux vous montrer *quelques tours à apprendre* facilement.
- (4) Un très joli dossier sur *la cuisine japonaise à réaliser* sans difficultés chez vous

これらのうち、(3)(4)のように「可能」を表す例については、*facilement* や *sans difficulté* のように、àVの表す動作を実現させることが、動作主にとって容易であるというような語彙的情

報を伴っているという点が注目される。このことから、N à V が表す「可能」の意味は、動作を容易に(労力をかけずに)行いたいという動作主の潜在的な希望が、必然的に実現されるということから生じていると考えられる。従って、この場合の「可能」は、厳密には「希望の必然的な実現」と呼ぶべきものであり、広義の「必然性」を表していると思なせる点で、(1)(2)のような「義務」との意味的な隣接性が認められる。

なお、この「義務および可能」の場合については、(5)に示すように、N à V の形で à V が N に対する付加形容詞として用いられる用法の他に、à V が être などの copule の後で属詞として用いられる用法がある。本研究では、この後者についても前者と関連付けて論じた。

(5) *C'est un travail à refaire.* = *Ce travail est à refaire.*

*C'est une femme à plaindre.* = *Cette femme est à plaindre.*

次に示すのは、<N est à V> という形で à V が N の属詞として用いられている例である。

(6) *Ce film est à voir absolument !*

(7) *On n'apprend rien de l'amour. Tout est à recommencer à chaque fois.*

これらはいずれも「義務」を表していると思なせる。インフォーマント調査によれば、<N est à V> は N à V と違って、「可能」の意味を明確には表しにくい。

こうした現象を考える際の手掛かりにするために、いわゆる代名動詞の受動的用法との比較を行った。代名動詞の受動的用法にも「義務」と「可能」の二通りの解釈が認められる。

「義務」*Ce tableau se regarde de loin.* (= *Ce tableau doit se regarder de loin.*)

「可能」*Ce livre se lit facilement.* (= *Ce livre peut se lire facilement.*) (Yamada 2009)

<N est à V> と代名動詞の受動的用法との用いられ方の違いは、次のようなところに現れると思われる。

<N est à V> の方が代名動詞の受動的用法より、動詞の表す事行の潜在的な動作主が特定されやすく、その事行の特定の場面や状況における実現が想定されやすい。

(8) *Ce vin est à boire maintenant.* / *Ce vin se boit frais.*

代名動詞の受動的用法はそれ自体で 1 つの規範 (norme) としての解釈を持つものに対して、

<N est à V> は話し手の設定する目的が別にある、その実現のための手段を示す場合に用いられやすい。

(9) *La truffe se coupe en tranches fines.*

(10) *L'oignon est à hacher, le chou chinois est à émincer finement, le brocoli est à couper en petits morceaux (pied compris) et la carotte est à travailler avec l'économiste pour faire des petites lamelles.*

従って、あくまで代名動詞の受動的用法と比較して、という前提の上でだが、<N est à V> は特定の場面や状況における V で表される事行の実現が想定されやすいということは言えるだろう。

なお、N à V が「義務および可能」の意味を持つ場合に見られる顕著な特徴は、否定を伴った N à ne pas V の形を許容することである。この N à ne pas V は常に「~すべきでない」という「否定の義務」つまり「禁止」の意味になり、その点は同様に義務を表す devoir や falloir の否定と共通している。一方、<N est à V> の形で à V が属詞として用いられる場合の否定としては、<N est à ne pas V> と <N n'est pas à V> の 2 つの形があり得る。この両者は等価ではなく、前者は常に否定の義務つまり禁止(「してはいけない」)の意味になるのに対して、後者は否定の義務(「してはいけない」)、不可能(「することができない」)、義務の否定(「しなくてもよい」)の間で曖昧になる。

### 「結果」: soleil à faire fondre le chocolat 型

「N à V」型名詞句には、(11)(12)のように、à V の部分が N によって引き起こされる「結果」を表していると思なすことのできる例が存在する。

(11) *Il faisait vraiment un soleil à brûler la peau.*

(12) *Madame da Veiga était une mince et délicate créature, toute menue et pourtant toute potelée, avec les plus belles mains et les plus beaux bras du monde, un sourire à damner tout un conclave,*

これらの例には、N と à V の間に、前者を原因、後者を結果とする意味的な因果関係が認められる。実は à V が結果の意味を表すのは、名詞句の場合のみではなく、(13)(14)のように à V が文末に用いられて、その前の文全体を修飾し、その文で述べられたことの結果や影響を表す例が存在する。

(13) *Il faisait chaud à faire fondre le chocolat des tablettes,*

(14) *Tout à coup, il me sembla que j'étais suivi, qu'on marchait sur mes talons, tout près, tout près, à me toucher.* (Maupassant, *Le Horla*)

この「結果」グループに属する N à V は、主に文末で副詞的に用いて、その前の文全体を就職する à V との連続性において捉え得るものである。(15)について言えば、a のような il fait + 形容詞の形が、b のような il fait + 名詞の形に変わると、名詞 (un soleil) 以降の部分が次第に遊離して感じられるようになり、最終的に c のような表現ができあがるということである。

- (15)a. Il fait chaud à *faire fondre* le chocolat.  
(16)b. Il fait un soleil à *faire fondre* le chocolat.  
(17)c. un soleil à *faire fondre* le chocolat

#### 「方向性」：machine à laver 型

ここでは、「N à V」型名詞句の中で、machine à laver のように一般に「用途」を表している  
とされるものを取り上げる。このグループに属する表現は、意味的に«Qui sert à» (actif) に対応  
するものと«Qui est à» (passif) に対応するものの2種類に分類できる。

«Qui sert à» (actif) :

carte à jouer ((英) *playing cards*), crème / mousse à raser ((英) *shaving cream / foam*), poêle  
à frire ((英) *frying pan*), salle à manger ((英) *dining room*), etc.

«Qui est à» (passif)

bois à brûler, gomme à mâcher ((英) *chewing gum*), maison à vendre, vin à emporter, etc.

このグループに属する à V には、それぞれのカッコ内に示すように、英語の-ing 形の付加形  
容詞に対応するものが多い。

このグループの à V は「用途」に基づく N の下位分類を表していると思なすことができる。  
例えば、

- machine à laver, machine à écrire, machine à calculer, machine à coudre
- tabac à priser, tabac à chiquer, tabac à rouler
- table à écrire, table à repasser

などの表現の à V の部分はいずれも machine や tabac や table の下位分類を表すレッテル的  
な役割を果たしている。

なお、「Qui est à» (passif) に属するものについては、à V が特定の場面や状況に依存するもの  
である場合がある。例えば同じ建物であっても所有者が売ろうとすれば maison à vendre にな  
り、貸そうとすれば maison à louer になるということがある。このことを反映して、この場合  
の「N à V」型名詞句は、次のように名詞文としての機能を持つことがある。

- (掲示や広告などで) Maison à vendre. (pour «une maison est à vendre») (Sandfeld 1965,  
267)
- (同上) Chambre à louer. (pour «une chambre est à louer») (*Ibid.*)

#### [参考文献]

- Huot, H. (1981), *Constructions infinitives du français : le subordonnant DE*, Droz.  
Sandfeld, Kr. (1965), *L'infinitif (Publications romanes et françaises ; 83. Syntaxe du français  
contemporain)*, Droz.  
Yamada, H. (2009), «Sur la valeur modale de la construction du verbe pronominal passif»,  
*Études de Langue et Littérature Françaises*, 95, 1-14.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>奥田智樹                         | 4. 巻<br>56          |
| 2. 論文標題<br>研究ノート「名詞 a 不定詞」型名詞句の意味分析    | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>フランス語学研究                     | 6. 最初と最後の頁<br>43-53 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|                                       |                       |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名<br>奥田智樹                        | 4. 巻<br>4             |
| 2. 論文標題<br>「名詞 a 不定詞」型名詞句の意味論         | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>人文学研究論集                     | 6. 最初と最後の頁<br>147-166 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>奥田智樹               |
| 2. 発表標題<br>「名詞 a 不定詞」型名詞句の意味論 |
| 3. 学会等名<br>日本フランス語学会          |
| 4. 発表年<br>2021年               |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|